

2026 7.22 (水) 開演時間 19:00

大分特別演奏会

Special Concert in Oita

iichiko 総合文化センター iichiko グランシアタ
iichiko Culture Center iichiko Grand Theater

「突然の再会」ー モーツァルトとプーランクー

指揮 **小林 資典**
Conductor Motonori Kobayashi

ピアノ **北村 朋幹**
Piano Tomoki Kitamura

コンサートマスター **扇谷 泰朋**
Concertmaster Yasutomo Ogitani

ヴォルフガング・
アマデウス・モーツァルト
Wolfgang Amadeus Mozart

交響曲 第38番 ニ長調 K.504「プラハ」

Symphony No.38 in D Major, K.504, "Prague"
I. Adagio - Allegro
II. Andante
III. Presto

休憩 Intermission

ヴォルフガング・
アマデウス・モーツァルト
Wolfgang Amadeus Mozart

ピアノ協奏曲 第24番 ハ短調 K.491

Piano Concerto No.24 in C Minor, K.491
I. Allegro
II. Larghetto
III. Allegretto

フランシス・プーランク
Francis Poulenc

組曲『牝鹿』FP36

Les biches, FP36
I. Rondeau
II. Adagietto
III. Rag-Mazurka
IV. Andantino
V. Final

7.24 (金) 開演時間 19:00

第441回 定期演奏会

The 441st Subscription Concert

アクロス福岡シンフォニーホール
ACROS Fukuoka Symphony Hall

大分特別演奏会 | 第441回 定期演奏会
Special Concert in Oita | The 441st Subscription Concert

7.22, 24 2026

大分特別演奏会

主催：(公財)九州交響楽団・iichiko 総合文化センター〔公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団〕
助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
| 独立行政法人日本芸術文化振興会・(公財)アフィニス文化財団
後援：大分県・大分県教育委員会・大分市・大分市教育委員会・NPO 法人大分県芸術
大分合同新聞社・NHK 大分放送局・OBS 大分放送・TOS テレビ大分・エフエム大分



特別協賛：九州電力 大分銀行

🗨 プレトーク

開演30分前から約10分間のプレトークを
お楽しみください。

🎭 楽団員お見送り

本公演終了後にロビーにて楽団員有志がみなさ
まをお見送りいたします。わずかな時間ではござ
いますが、お気軽にお声がけください。

第441回 定期演奏会

主催：(公財)九州交響楽団
助成：福岡県・福岡市・文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業
(公演創造活動)) | 独立行政法人日本芸術文化振興会・(公財)アフィニス文化財団
後援：福岡県・福岡市・(公財)福岡市文化芸術振興財団・NHK 福岡放送局
(公財)九州文化協会・福岡文化連盟・九響後援会
協力：(公財)アクロス福岡



特別協賛：ALI WEL
All is Well.
アリウェル株式会社

🗨 プレトーク

開演30分前から約10分間のプレトークを
お楽しみください。

🎭 楽団員お見送り

本公演終了後にロビーにて楽団員有志がみなさ
まをお見送りいたします。わずかな時間ではござ
いますが、お気軽にお声がけください。



© Jens Feierabend

指揮 小林 資典
Conductor Motonori Kobayashi

千葉県出身。東京藝術大学、同大学大学院、ベルリン芸術大学で指揮を専攻。ライン・ドイツ・オペラ（デュッセルドルフとデュースブルク）を経て2008年、ドルトムント市立劇場の専属指揮者として契約、2013年、同劇場の音楽総監督代理兼第一カペルマイスターに就任、ドイツのAクラス劇場で重責を担う。オペラのレパートリーは、18世紀から20世紀、イタリア、ドイツ、フランスものまで多岐にわたる。

ドルトムントで2021/22シーズンに新制作指揮したサン＝サーンスとギロー、デュカス作曲『フレデゴンド』は、権威あるオペラ専門誌『オーパンヴェルト』誌22年年鑑で「最優秀発掘上演」に選ばれた。同誌の年鑑最優秀に絡んだ日本人はこれが初めてである。

バレエは、ドルトムントのほかバーデン州立歌劇場（カールスルーエ）などでも指揮、2019年9月、バレエ・アム・ラインの初来日公演指揮に抜擢された。コンサートではドルトムント響に加え、客演指揮も多い。また読売日本交響楽団からは2021年以来毎シーズン招かれている。

さらに2022年以来、国立音楽大学大学院オペラの指導と指揮に招かれ、教育活動にも心血を注いでいる。

Born in Chiba, he studied conducting at Tokyo University of the Arts, its graduate school, and the University of the Arts Berlin. After working with Deutsche Oper am Rhein, he became resident conductor of Theater Dortmund in 2008 and was appointed Acting General Music Director and First Kapellmeister in 2013. His opera repertoire spans the 18th to 20th centuries across Italian, German, and French works. In 2022, Opernwelt named his Frédégonde production "Best Rediscovery." He also conducts ballet and concerts, and has led the Yomiuri Nippon Symphony Orchestra annually since 2021. He teaches opera at Kunitachi College of Music.



© TAKA MAYUMI

ピアノ 北村 朋幹
Piano Tomoki Kitamura

愛知県生まれ。浜松国際コンクール第3位、シドニー国際コンクール第5位、リーズ国際コンクール第5位、ボン・テレコム・ベートーヴェン国際コンクール第2位入賞。第3回東京音楽コンクールにおいて第1位ならびに審査員大賞（全部門共通）受賞以来、独自のプログラミング・センスで展開するソロリサイタルをはじめ、オーケストラとの共演、室内楽、古楽器による演奏活動を日本とヨーロッパ各地で定期的に行っている。近現代作品の演奏への評価も高く、2022年、びわ湖ホール及び、滋賀県立美術館で行った「北村朋幹 20世紀のピアノ作品」が、第22回佐治敬三賞受賞。録音は、2026年3月発売の「アステリズム」を含む7タイトルのアルバムをフォンテックよりリリース。2021年録音の「ケージ プリベアド・ピアノのためのソナタとインターリュード」は令和3年度（第76回）文化庁芸術祭賞 レコード部門 優秀賞を受賞。また2023年録音の「リスト 巡礼の年 全3年」ほかの成果が『美的にも知的にも余人を圧倒する音楽家の出現』と評価され、令和6年度（第75回）芸術選奨 音楽部門 文部科学大臣新人賞受賞。

東京藝術大学に入学後、2011年よりベルリン芸術大学ピアノ科で学び最優秀の成績で卒業。またフランクフルト音楽・舞台芸術大学では歴史的奏法の研究に取り組んだ。ベルリン在住。

Born in Aichi (Japan) and based in Berlin, Tomoki Kitamura's solo career was launched when he won 1st prize and the Grand Jury Prize at the prestigious Tokyo Music Competition, soon to be followed by prizes at international piano competitions including Hamamatsu, Sydney, Leeds, and Beethoven Competition (Bonn). In early 2025, he was named "Best Emerging Classical Artist of 2024" in Japan in the Japanese cultural ministry's 75th "Art Selection Award". His seven solo-albums to date, with repertoire spanning classical to contemporary CDs, all received excellent reviews and accolades. Kitamura studied piano with Prof. Kei Itoh, Prof. Ewa Poblocka, and Prof. Rainer Becker. After receiving his Diplom with the Distinction from Universität der Künste Berlin in 2017, he continued his research focusing on historical interpretation practice with Prof. Jesper Christensen at Hochschule für Musik und Darstellende Kunst Frankfurt am Main.

解説 堀 朋平（音楽美学、九州大学ほか非常勤講師／住友生命いずみホール音楽アドバイザー）

交響曲 第38番 ニ長調 K.504「プラハ」

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756—1791）

18世紀の「交響曲」は、コンサート開幕の幕開けに鳴らされる軽いジャンルだ。ときに野外や聖堂で演奏されることもあったし、聖（教会音楽）と俗（民衆音楽）は軽やかに混ざりあった。耳をすませば、人々のざわめき、野外の鳥たち、悠久なる静寂……といった世界の音たちが、モーツァルトの交響曲から聴こえてくるだろう。

それが突然に深まりを見せる。ウィーンに住んで5年目のこと、隣国ボヘミア王国（現チェコ）の首都プラハが30歳のモーツァルトに熱いラブコールを送りだした。オペラ『フィガロの結婚』上演の大成功（1786年12月）をうけ、翌月にたずさえて行って披露したのが本作である。以後このジャンルで遺されたのは、いわゆる「三大交響曲」（第39—41番）しかない。

第1楽章 おぼろに揺蕩う序奏、明と暗（長調と短調）を往還するうねり、そこから湧きだす小川のような潤い、楽器たちのやさしい絡みあい……いずれも交響曲の概念を塗りかえる特徴だ。フェミニズムの旗手でもある音楽学者スーザン・マクレアリ（1946—）は、史上かつてない深みをこの楽章に聴きとった。まるで感情の水門を操作するみたいにして、作者が自分の内面性を流れさせてくる音楽です、と。

第2楽章 伸びやかながら、翳りをたたえた半音階による冒頭のメロディ。かと思えば不意に短調のエピソードが心を揺さぶってくる。美しくも儚い、ロマン派みたいな音調。26年後にシューベルトが初の交響曲（第2楽章）で敬意とともに引用したのも納得だ。ふつうは次にくるメヌエット楽章が省略されているのも、こうした深みゆえかもしれない。

第3楽章 冒頭テーマは『フィガロの結婚』第2幕の二重唱「はやく開けて」の動機を変奏している。女中スザンナと女装少年ケルビーノはこっそり画策中。そこへやってくる伯爵。ああ、この子を逃がさないと見つっちゃうわ！ はやく衣装部屋の鍵を開けて！—— “くすくす笑い”すらも音になっているのが聴こえてくるだろう。

作曲：1786年12月6日完成

初演：1787年1月19日、プラハの現エステート劇場

使用楽譜：Bärenreiter

編成：フルート2、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦5部

ピアノ協奏曲 第24番 ハ短調 K.491

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756—1791）

ヨーロッパの地図を思い浮かべてみよう。山峡と大河に囲まれたウィーンは、まさに“西と東”をつなぐ要衝だから、中世の昔より文化・政治・経済の中心であった。おのずと各国の貴族が居をかまえ、休暇は金に糸目をつけず優雅にすごす。

それにあわせて飛びきり上等の音楽を提供するチャンスも満ちていた。ウィーンが音楽の都たる理由だ。だからこそモーツァルトは——先輩ハイドンや後輩ベートーヴェンと同じく——20代で故郷を捨てて移り住んだのである。

このチャンスに名を売るいちばんの機会が、自分のスター性を思うさま披露できるピアノ協奏曲であった。そのため「難しすぎず、易しすぎない（…）音楽通もそうでない人も嬉しくなる」（父宛、1782年）とみずから謳う作品を、最初の5年で7つ披露する。

だがまもなく、楽都にも暗雲が漂いはじめた。トルコとの戦争やフランス革命の余波だ。モーツァルトもこれに敏感にならざるをえなかったのだろう、最後の5年間にピアノ協奏曲は2つしか書かれていない。

そんな暗雲を予告するかのようハ短調（K.491）は、聴衆を「嬉しく」させるのとは真逆のしらべ。同時期の変ホ長調（K.482）とイ長調（K.488）のシリーズを閉じる「三部作の最終作」でもある。短調をとるのは全27作のうち2作だけであり、そのシリアスな音調は19世紀から絶大な人気をほこってきた。

第1楽章 「バランス感覚」はbi-lanx（2つの皿をもつ天秤）を語源とする。つまり2（4）拍子がひとに安心感を与えるわけだ。これを逆手にとり、モーツァルトは3拍子の冒頭楽章——ピアノ協奏曲では他に2作しかない——に極度の不安と緊張を盛り込んだ。自筆譜にカデンツァ（即興）の指示がない点でも異例。北村朋幹さんはどんなカデンツァを聴かせてくれるのだろうか？

第2楽章 不安からの逃避のような、優しい冒頭テーマ。これが何度も還ってくる「ロンド形式」はふつう終楽章に取っておくもので、かなり珍しい。だから**第3楽章**はロンドではなく「変奏曲」になったのだろう。悲壮感をたたえた静かなテーマがしだいに昂揚し、まるで英雄の死のようにフォルテでこと切れる。

作曲：1786年3月24日 完成
初演：1786年4月7日、ウィーンのブルク劇場
使用楽譜：Bärenreiter
編成：フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦5部、独奏ピアノ

組曲『牝鹿』FP36

フランス・プーランク (1899—1963)

重力から逃れて

「モーツァルト、シューベルト、ショパンをいちばん大切にしていた母の好みを（…）引き継いだのでしょね、音楽でモーツァルトに優るものはないと私は思っています」（『プーランクは語る』、千葉文夫訳 [一部改変]）。

だがこうも語る。「シューベルトがいなかったとしても音楽の流れは変わりません」。優れた音楽家が革新者とは限らないのだ。まさにこう語る本人こそ、革新からもっとも絶妙に距離をとった作曲家である。

少年プーランクの生きた20世紀初頭のパリは、それこそ革新者の街だった。美術界ではフォービズム（野獣派）やキュビズム（立体派）の嵐が巻き起こる。この動きに親しんだ音楽プロデューサーのセルゲイ・ディアギレフは、ロシア・バレエ団を率いて新進の作曲家ストラヴィンスキーを起用し、『春の祭典』（1913）で人びとを興奮と怒号のるつぽに叩きこんだ。

この流れに逆らえる者などいない。プーランクもディアギレフと深い接点を持ち、ストラヴィンスキー作品の初演にもかかわったが、けっきょく正反対の美学を選びとる。「フランス6人組」として知られる運動である。彼らは、深遠なドビュッシー、劇的なワーグナー、愛らしきラヴェルといった“大きな流れ”から悉く距離を取り、「サーカスや縁日」のノリを愛する。

軽妙なる倒錯

そうやって選ばとられた限りない“軽妙さ”に、今日の演目を読み解くカギがひそむ。1921年11月、プーランクはディアギレフから新作バレエの作曲を依頼されるも、台本作家の筆がすまず、翌年の夏には「台本もテーマもなし」の作曲を決意する。そもそも筋にあまり重きをおかないのが、バレエの伝統というもの。ショパンの音楽にあわせて女性の精霊たちと一人の男性が踊る『シルフィード』（1907）がよく知られて

いる。この先例にならった「雰囲気^{つや}のバレエ」を、もっと艶っぽく、ロ可可時代の浮薄^{ふはく}な色恋みたいな感じで作ろう——プーランクはそう思い至ったのだった。作曲家によるタイトル「牝鹿（レ・ビッシュ）」は若い女性を含意するが、ちょっと性的に変わった女性／男性を意味することもあるという。

舞台には、青いソファがひとつだけ。タバコ片手にスリッパ(!)を履いた「ホステス」と、青い衣装に身を包む「ギャルソンヌ」（少年っぽい女性）、3人の水着の「男たち」、レズビアンを匂わせる「灰色の女たち」が踊る。初演で振り付けを担当して「ホステス」を演じたのが、誰だろう、ディアギレフの伴侶だった天才舞踏家ニジンスキーの妹ニジンスカ。「ギャルソンヌ」を演じたヴェラ・ネムチノワは、青い衣装をディアギレフに切られて脚を露出しつつ、無二のオーラを絶賛された【右図】。



初演で「アダージェット」を踊る
ヴェラ・ネムチノワ（手前）

序曲+8曲（合唱2曲を含む）からなるバレエに基づいて、1939年にプーランクは全5曲の管弦楽バージョンを編んだ。トランペットの主題で幕を開ける **1. ロンド**につづき、甘く半音階的な **2. アダージェット**では、両性具有のギャルソンヌ【右図】が人びとを魅惑した。ジャズとポーランド舞曲が融合した——しかしどちらのスタイルともずれた—— **3. ラグ＝マズルカ**はニジンスカ本人の見せ場だった。**4. アンダンティーノ**は、3人の男たちがギャルソンヌと絡む軽快かつ騒がしいナンバー。高速な **5. フィナーレ**では全ダンサーが華やかに登場した。

作曲：1923年7月—11月

初演：1924年1月6日、モンテカルロ歌劇場（バレエ版）

使用楽譜：Heugel

編成：フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓3、シンバル、サスペンデッドシンバル、トライアングル、タンバリン、グロッケンシュピール、ハープ、チェレスタ、弦5部

 演奏会のご感想をお寄せください

7月22日／大分特別演奏会
ご感想はこちらから →



7月24日／第441回定期演奏会
ご感想はこちらから →

